

看護学生の災害看護学履修別防災意識と防災行動の検討

中村有美子・藤井 可苗・菅野 夏子・小野ツルコ

抄 録

本研究の目的は、災害看護学の履修と看護学生の防災意識と防災行動との関連を明らかにし、今後災害看護教育の在り方を検討することである。

看護学生1年次生から4年次生を対象に防災意識、防災行動について自己記入式質問紙調査を行い、1年次生、2年次生を災害看護学未履修群、3年次生、4年次生を既履修群として分析をした結果、履修の有無において関連が認められた項目は、住まいが家族と同居及び実家において、「家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している」と防災マップの「認知あり」であった。看護学生は、災害看護学で「災害時の備え」等の知識はあるが、実際の行動に移すことは困難な現状が明らかとなった。今後、看護職者は、人々の生活と生命の安全を守る者として、危機管理の必要な職務であることの自覚を持つことのできる教育の必要性が示唆された。

キーワード：災害看護学、看護学生、防災意識、防災行動

I. はじめに

平成23年3月に発生した東日本大震災以前より、地震や風水害等の災害への備えの重要性は言われており、被害を最小限に抑えるためには、平時からの備えが不可欠である。看護基礎教育においても災害看護教育の必要性が認識され、平成21年度の指定規則改正により、「災害直後から支援できる看護の基礎的知識について理解する」と明記された。A大学においても「災害看護学」を21年度入学生より3年次、23年度入学生より4年次に必修科目として位置づけており、学生は、1単位15時間の講義の中で、災害への備えについて学習を行なっている(表1)。

看護学生の災害看護に対する意識や災害看護教育のニーズに関する先行研究では、学生は災害看護への興味関心は高く、その興味関心は災害直後の急性期の看護実践に置かれており、防災意識や防災行動は低く、学生は対策を講じれば被害を軽減できると認識しているにも関わらず、防災対策を十分に講じていない¹⁾。また、看護学生と他学部学生と比較した結果、看護学生は、災害や防災に対する興味、災害時の役割意識などは高いが、避難行動や対策などの防災行動は他学部学生と同様、あまり備えがなく、行動は伴っていない²⁾と報告されている。

Yumiko Nakamura
Kae Fujii
Natsuko Sugano
Turuko Ono
関西福祉大学看護学部

そこで、本研究の目的は、甚大な被害をもたらした東日本大震災後に災害看護学の履修と看護学生の防災意識と防災行動の関連を明らかにすることにより、災害看護教育の在り方を検討するための基礎材料とすることである。

用語の定義

災害看護：災害に関する看護独自の知識や技術を体系的

表1 災害看護学講義内容

No	テーマ	内容
1	災害とは	1) 災害の定義と分類・特性 2) 災害のサイクルと各期の特徴
2	災害看護とは	1) 災害看護の定義 2) 災害時のニーズアセスメント 3) 災害時に特徴的な健康問題
3	災害中・長期の看護	1) 避難所における看護活動 2) 中・長期における健康問題
4	こころのケア	1) 災害被災者の心理 2) 災害時のストレス反応やPTSD 3) 被災者のメンタルケア
5	テスト	テスト No. 1～4ふりかえり
6	要援護者へのケア	1) 災害時に子どもに起こること 2) 災害時に妊産褥婦に起こること 3) 災害時に慢性疾患患者に起こること 4) 災害時に高齢者に起こること
7	災害への備え	1) 自己防災 2) 病院防災 3) 地域防災 4) ネットワークの構築
8	救援活動 (国内・国際)	1) 災害に対する国内の体制 2) 災害に対する国際的な体制 3) 支援活動 4) 救護者へのケア

かつ柔軟に用いると共に、他の専門分野と協力し、災害の及ぼす生命や健康生活への被害を極力少なくするための活動を展開すること

防災意識：災害で招く被害を軽減させるための災害や防災に対する意識

防災行動：災害で招く被害を軽減させるための行動や備え

II. 研究方法

1. 研究対象者

平成23年度A大学看護学部在学中の1年次生90名、2年次生91名、3年次生98名、4年次生100名、合計379名を対象とした。

2. 調査時期及びデータ収集方法

調査時期は、1、2年次生は後期授業終了時、災害看護学を履修した3、4年次生においては、実習等の関係上、災害看護学授業終了後7～8ヵ月経過した時期であり、国家試験対策模擬試験終了時に実施した。

研究の趣旨を口頭及び書面にて学年別に説明を行い、調査は無記名自記式とし、調査票の回収は、講義室の外に設置した回収ボックスにて回収を行なった。

3. 調査内容

1) 看護学生の属性は、学年、性別の他、居住形態については、「家族と同居である」「下宿している」「その他」の3選択より回答を得た。

災害による被害経験については、地震、台風などの自然災害を14項目抽出し、複数回答での回答を得た。

2) 防災意識については、内閣府による『防災に関する世論調査』³⁾を参考に必要な項目の抽出を行った。災害についての関心度は、東日本大震災のような大震災に対する関心がここ1年以内にどのように変化したか。という問いに①関心が高くなった②変わらない③関心が低くなった④わからないの4段階評定法での回答を得た。さらに災害に対するリスク認識では、あなたの住んでいる地域が災害に対し安全だと感じていますか。それとも危険だと感じていますか。の問いに①安全②ある程度安全③安全とも危険ともいえない④ある程度危険⑤危険⑥わからないの6段階評定法での回答を得た。居住地域の災害危険場所の認知については、①危険な場所がどこであるか知っている②危険な場所があることは知っているが、その場所がどこであるかは知らない③危険な場

所があるかどうか知らない④危険な場所がないことを知っているの4段階評定法での回答を得た。

3) 防災行動については、前述⁴⁾を参考に災害時の備えの項目を12項目抽出し、それぞれにおいて①必要性を理解し準備出来ている②必要性は知っているが準備していない③必要性は知らずに準備出来ていない④必要性を感じないので準備の必要性はないの4段階評定法での回答を得た。防災マップの所持については、①持っている②持っていないが見たり聞いたりしたことがある③見たことはないが聞いたことはある④見たり聞いたりしたことはないの4段階評定法での回答を得た。

4. データ分析方法

災害看護学の履修の有無と防災意識や災害行動との関連を明らかにするために、看護学生を災害看護未履修群と既履修群に分け、Pearsonの χ^2 あるいはFisherの直接検定によって確認した。分析にはMicrosoft Excel 2010およびIBM spss statistics 14.0J for Windowsを用い、有意確率は $P < 0.05$ とした。

災害看護学の履修の有無別においては、1、2年次生を未履修群、3、4年次生を既履修群とグループに分け、分析を行なった。

5. 調査期間

平成23年11月～24年2月

6. 倫理的配慮

研究への協力については、調査票配布時に研究目的、研究参加の自由意思と拒否権、プライバシー及び個人情報の保護、成績評価とは関係がないこと、結果の公表について記載した文書を用い口頭で説明を行なった。調査票の提出をもって研究の同意が得られたものとした。なお本研究は、A大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

1. 対象者の概要

1) 質問紙の回収率と対象者の概要

調査票の配布は、379名に配布し、213名(56.2%)より回収が得られた。分析は、回収が得られた213名を分析対象とした。分析対象者の属性では、性別、男子23名(10.8%)、女子190名(89.2%)、居住形態においては、家族と同居98名(46.0%)、下宿115名(54.0%)であった。

表2 質問紙の配布数と回収状況及び学生の属性

			1年次生	2年次生	3年次生	4年次生	全体
質問紙の配布数	人 (%)		90 (23.7)	91 (24.0)	98 (25.9)	100 (26.4)	379 (100)
質問紙回収数	人 (%)		54 (25.3)	75 (35.2)	41 (19.2)	43 (20.2)	213 (100)
回収率	%		60.0	82.4	41.9	43.0	56.2
性別	男子	人 (%)	12 (22.2)	7 (9.3)	1 (2.4)	3 (7.0)	23 (10.8)
	女子	人 (%)	42 (77.8)	68 (90.7)	40 (97.6)	40 (93.0)	190 (89.2)
住居形態	家族と同居	人 (%)	29 (53.7)	34 (45.3)	17 (41.5)	18 (41.9)	98 (46.0)
	下宿	人 (%)	25 (46.3)	41 (54.7)	24 (58.5)	25 (58.1)	115 (54.0)
災害看護学の履修状況*1	未履修群	人 (%)	129 (60.6)				129 (60.6)
	既履修群	人 (%)			84 (39.4)		84 (39.4)

注) 1、2年次生を未履修群、3、4年次生を既履修群とする

災害看護学の有無において、未履修群129名(60.6%)、既履修群84名(39.4%)であった(表2)。

2) 災害による被害体験

「今までに災害によって被害を受けたり、身近に危険を感じたことはありますか」の問いに複数回答で回答した結果、168名(78.9%)の学生が何らかの災害を経験していた。経験していた災害の種類は、台風が最も多く、次いで地震、豪雨の順であった(図1)。

災害による被害経験回数は、のべ427回であり、被害経験のある学生1名あたり2.5回経験したことになる。

2. 防災意識に関して

1) 災害に対する関心度

東日本大震災のような大地震に対する関心がここ1年以内「高くなった」と答えた学生が既履修71名(84.5%)、未履修109名(84.5%)と災害に対する関心度では、災害看護学の履修の有無では有意な関連が認められなかった(表3)。

2) 災害に対するリスク認識

災害に対するリスク認識として、「住んでいる地域が災害に対し安全だと感じているか、それとも危険だと感じているか」を「安全」「ある程度安全」「安全とも危険ともいえない」「ある程度危険」「危険」の5段階評定法

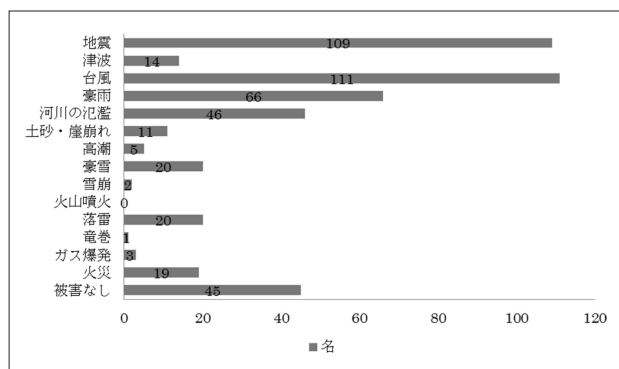


図1 災害による被害体験 (複数回答)

での回答を求め、「安全」「ある程度安全」と回答した群を『安全群』、「ある程度危険」「危険」と回答した群を『危険群』として、災害看護学の履修の有無別でみたところ、未履修では「安全」と捉えている学生が48名(37.2%)に対し、既履修では26名(30.9%)であった。反対に「危険」と捉えている学生は未履修47名(36.5%)に対し、既履修25名(29.8%)という結果であり、有意な関連は認められなかった(表4)。

3) 居住地域の災害危険場所の認知

居住地域の災害危険場所の認知の有無については、全体で「知っている」が67名(31.8%)、「あることは知っているが場所は知らない」48名(22.7%)、「あるかどうか知らない」においては90名(42.7%)の回答であった。災害看護学の履修の有無では、有意な関連は認められなかった(表5)。

3. 防災行動に関して

1) 災害時の備え

大地震が起こった場合に備えて、家族と同居及び実家

表3 履修有無別災害に対する関心度 n=213

	高くなった	変わらない	低くなった	わからない	p
未履修	109 84.5%	18 14.0%	0 0.0%	2 1.5%	0.076
既履修	71 84.5%	7 8.3%	3 3.6%	3 3.6%	
全体	180 84.5%	25 11.7%	3 1.4%	5 2.4%	213 100%

表4 履修有無別災害に対するリスク認識 n=213

	安全	どちらともいえない	危険	わからない	p
未履修	48 37.2%	27 20.9%	47 36.5%	7 5.4%	0.123
既履修	26 30.9%	30 35.7%	25 29.8%	3 3.6%	
全体	74 34.7%	57 26.8%	72 33.8%	10 4.7%	213 100%

表5 履修有無別居住地域の災害危険場所の認知

n=211

	知っている	あることは知っているが場所が知らない	あるかどうか知らない	ないことを知っている	p
未履修	43 33.6%	28 21.9%	53 41.4%	4 3.1%	0.881
既履修	24 28.9%	20 24.1%	37 44.6%	2 2.4%	
全体	67 31.8%	48 22.7%	90 42.7%	6 2.8%	211 100%

(欠損値2名を除く)

表6 災害看護学履修有無別災害時の備え(家族と同居及び実家)

	未履修 (n=129)		既履修 (n=84)		p
	準備出来ている群	準備出来ない群	準備出来ている群	準備出来ない群	
消火器や水のはったバケツを準備している	31 24.0%	98 76.0%	20 23.8%	64 76.1%	0.970
いつも風呂の水をため置きしている	14 10.9%	115 89.1%	5 6.0%	79 94.0%	0.325
家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している	25 19.4%	104 80.6%	28 33.3%	56 66.7%	0.021*
ブロック塀を点検し、倒壊を防止している	12 9.3%	117 90.7%	6 7.1%	78 92.9%	0.625
自分の家の耐震性を高くしている	25 19.4%	104 80.6%	17 20.2%	67 79.8%	0.878
食料や飲料水の準備をしている	36 27.9%	93 72.1%	29 34.5%	55 65.5%	0.305
携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備している	52 40.3%	77 59.7%	44 52.4%	40 47.6%	0.084
非常持ち出し用衣類、毛布などを準備している	22 17.1%	107 82.9%	9 10.7%	75 89.3%	0.236
貴重品などをすぐに持ち出せるように準備している	24 18.6%	105 81.4%	24 28.6%	60 71.4%	0.089
家族との連絡方法などを決めている	33 25.6%	96 74.4%	19 22.6%	65 77.4%	0.623
近くの学校や公園など避難する場所を決めている	42 32.6%	87 67.4%	26 31.0%	58 69.0%	0.806
防災訓練に積極的に参加している	13 10.1%	116 89.9%	5 6.0%	79 94.0%	0.326

*p<0.05

と下宿の住まい別に、どのような対策をとっているかの問いに対し、「①必要性を理解し準備出来ている」、「②必要性は知っているが準備していない」、「③必要性は知らず準備出来ない」、「④必要性を感じないので準備の必要性はない」、の4段階評定法での回答結果を①を『準備出来ている群』、それ以外を『準備出来ない群』の2群に分け、各々の質問項目に対し災害看護学履修の有無で検定を行った。

その結果、家族と同居及び実家において「家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している」(p=0.021)のみ有意な関連を認められた(表6)。

下宿の学生においては、災害看護学履修の有無では、有意な関連は認められなかった。

2) 防災マップの所持及び認知

住んでいる地域の防災マップや災害危険予想図(ハ

ザードマップ)等の防災対策資料の所持、あるいは、認知の有無の問いに対し、「①持っている」、「②持っていないが見たことがある」、「③見たことはないが聞いたことがある」、「④見たり聞いたりしたことはない」の4段階評定法での回答結果を④を『非認知群』、それ以外を『認知群』とし、災害看護学履修の有無別で検定を行った。

その結果、災害看護学既履修の学生の認知に有意な関連を認めた(p=0.028)(表7)。

IV. 考察

1. 看護学生の防災意識について

近年、災害においては、行政や専門家の危機管理部門や医療職だけでなく、あらゆる人々が災害や防災に関心を寄せている。そのような状況の中、人々の健康を守り、日常的に生命に接し、安全確保を最優先に行う専門的技

表7 災害看護学履修有無別防災マップの認知 n=213

	認知あり	認知なし	p
未履修	60 46.5%	69 53.5%	0.028*
既履修	52 61.9%	32 38.1%	

*p<0.05

術を有する看護職を目指した看護学生の防災意識の現状を「災害に関する関心度」、「災害に対するリスク認識」、「居住地域の災害危険場所の認知」の観点から災害看護学の履修の有無別で検定を行ったが、有意な関連は認められなかった。

1) 災害に関する関心度

全体で80%以上の学生が、「災害に対して関心が高くなった」と回答しているが、調査の時期が、東日本大震災と同じ年であったため、記憶に新しく、メディアからの情報が常に流れていたことが、関心を高めた理由とも考えられる。しかし今後は、災害に対し、一時の興味関心だけでなく、看護職者を目指す学生として、危機管理の必要性や、災害に対しての意識を高め、支援の継続も念頭におきながら、「遠くで起きた災難」と意識の中で風化させないことが大切と考える。

2) 災害に対するリスク認識

全体で168名(78.9%)の学生が災害による被害体験をしているにも関わらず、74名(34.7%)の学生は自分の住んでいる地域が災害に対して安全であると感じているという現状であった。このことより、災害の経験や災害に対しての関心は高くなっているが、自分の住んでいる地域は安全だと考えている現状がうかがえた。

社会心理学では、身近に災害があっても自分はさほど被害がなかった場合「自分だけは大丈夫」だという非現実的な安心感や他の人には災害や事故が起こるかもしれないけど、自分が実際に被害にあう確率は低いと考える傾向のことを「楽観バイアス」、「非現実的な楽観主義」と呼んでいる⁴⁾。看護学生においてもこの「楽観バイアス」、「非現実的な楽観主義」が考えられ、災害時における看護職者の役割を認識するまでには至っていないと考えられる。今後、看護職者として人々の生活と生命の安全を守る者として、危機管理の必要な職務であることの自覚を持つ必要があることが示唆された。

3) 居住地域の災害危険場所の認知

居住地域の災害危険場所の認知は、全体で90人(42.7%)が「あるかどうか知らない」という結果であった。災害看護学履修の有無でも関連は認められなかったが、「知らない」で終わるのではなく、今後起こり得る問題に対

し、ある程度の予測を立て行動を行う看護職を目指す学生にとって、必要な情報を収集する能力や危険を回避する能力も備え持つことが必要であると考えられる。

2. 防災行動について

災害時の備えを、災害看護学の履修の有無別において、「準備出来ている群」、「準備出来ていない群」に分け分析した結果、「家具や冷蔵庫などを固定し、転倒を防止している」についてののみ有意な関連が認められた。これは、住まいが家族と同居及び実家の学生のみであったため、災害看護学の履修により知識が行動へと変化したとは言い難い。また、他の備えの項目においては、関連が認められなかった。このことより、災害看護学で学んだことにより、知識として習得出来ていても、実際の行動に移すことは困難な現状がうかがえる。

前述の災害に対するリスク認識においての「楽観バイアス」、「非現実的な楽観主義」も影響要因として考えられるが、知識と行動は異なる現状が明らかとなった。今後、知識を行動に移すことができるような教育が必要であるとする。さらに、防災行動において「自宅の備え」等の知識は、個人だけでなく、家族、近隣へも啓発することが大事であり、今後防災意識を高め、自己防災の知識の啓発においても看護職に求められる役割であると考えられる。

3. 災害看護教育について

看護基礎教育における災害看護教育の目的は、災害発生前後における社会の変化と課題ならびに人々の健康状態と課題を理解し、さらにこれらに対する看護の役割を理解することであり、災害発生時には、他の看護職からの指示を受けながら、看護活動に参加できる基礎的な知識や技術をもった人材を育成することである⁵⁾。その目的を達成するためには、「災害とは何か」「災害の備えとして行うこと」「災害時の看護活動」等の講義内容があるが、講義だけでは習得出来ない、トリアージ技術や自動体外式除細動器(AED)の使用などの技術の習得や災害場面を想定し、シミュレーションを用いた教育内容の必要性も考えられる。看護基礎教育における災害看護の教育内容を検討した梅崎は、グループワークによる図上演習・ヘリ搬送の研修・ビデオ視聴・災害派遣の経験者の講話を組み合わせた教育方法が有効であり、災害時の看護師の役割を認識させるためには、災害のサイクル各期における看護を事例や演習を交えながら教育することが重要である⁶⁾と述べている。今後、本学において

も演習やグループワーク、災害派遣経験者の講話等の導入が必要であると考え。

さらに、自然災害だけでなく、人為災害と言われる大規模な事故などは、予測困難な状況下で突然起こる。人々の生活や生命を守る看護職は、危機管理意識を強く持ち、常日頃からの備えとして、準備や訓練は必要であるが、教育において、災害看護学だけで対応出来るものではなく、他の科目においても、危機管理意識を高める教育が必要であると考え。

また、松清は、看護基礎教育において、学生の防災意識を変化させ防災行動に繋げていくには、居住地域を視野に入れた災害看護を学生が自ら考えられるような教育が必要であると述べている^{2) 7)}。さらに尾崎は、災害に遭遇した看護学生の体験より、災害看護教育について、学生自身が災害に遭遇した時の対処方法、及び住民の1人として、地域住民と協働し地域を災害から守る意識を育て、「自己防災・地域防災」に関する課題が明らかになったことを述べている⁸⁾。今後、自分の住んでいる地域での避難場所や危険箇所の認知、防災マップ等を用い、地域の防災訓練に参加するなどの教育も必要であると考え。

さらに田崎らの看護師を対象とした調査においても、災害看護学の履修の有無と現在の職場における避難場所の認知に有意差がなかった⁹⁾との報告がある。これらのことより、学生時代に履修した知識を活用した職場における現任教育を断続的に行い、危機管理の一貫として、日常の看護業務と共に防災、避難訓練の重要性の知識を行動へ移せるよう継続教育の必要性が示唆された。

V. 結論

看護系大学生の防災意識と防災行動の現状は、災害の被害経験はあるが、災害に対するリスク認識は、災害看

護学の履修の有無では関連が見られない。また、災害看護学で防災についての備えの知識は持っているが、行動に移せていない。という現状が明らかとなった。

本研究は、平成23年度、関西福祉大学地域福祉政策研究所の研究助成を受け実施した。

引用文献

- 1) 西上あゆみ：看護学生の災害看護学授業に関する意識調査, 看護総合, 31, 71-73, 2000.
- 2) 松清由美子, 野村志保子, 森本紀巳子：看護大学生の防災意識とその影響要因, 日本災害看護学会誌10(3) 36-49, 2009.
- 3) 内閣府大臣官房政府広報室(2002), 防災に関する世論調査, 2013年6月17日
<http://www8.cao.go.jp/survey/h14/bousai-h14/>
- 4) 仁平義明:防災の心理学ほんとうの安心とは何か(初版), 7-8, 東信堂, 東京, 2009.
- 5) 南裕子, 山本あい子：災害看護学習テキスト概論編(第1版) 64-65, 日本看護協会出版会, 東京, 2007.
- 6) 梅崎節子：看護基礎教育における災害看護の教育内容の検討, プレホスピタル・ケア, 24(3), 68-71, 2011.
- 7) 松清由美子：災害特性の異なる地域で生活する看護学生の防災意識および防災行動の相違, 日本医学看護教育学会誌, 21, 39-44, 2012.
- 8) 尾崎道江：災害看護学教育における教育的課題 東日本大震災に遭遇したA大学看護学生の体験から, 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 3(1), 47-56, 2012.
- 9) 田崎智恵子, 久保恭子, 及川裕子他：乳幼児の看護に携わる看護職の防災に関する意識, 日本災害看護学誌, 14(2), 35-48, 2013.